能勢

畧譜 天

共三

二百十一冊ノ内


| 内閣文庫 | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 和書 | | 三六〇八八 | 二一一 | 一五六 一七 |
| 類 | | 號 | 冊 | 架 |

394

| 内閣文庫 | | |
|---|---|---|
| 番號 | 和 | 36088 |
| 冊數 | 211(107) | |
| 函號 | 156 | 17 |

国立公文書館 National Archives of Japan

碁譜　天

共三

能勢

二百十一冊ノ内


内閣文庫

| 和書 | 類 | 三六の八八 號 | 二三 冊 | 一五六 函 | 一〇 架 |
|---|---|---|---|---|---|

内閣文庫

| | |
|---|---|
| 番號 | 和 36688 |
| 冊數 | 211(107) |
| 函號 | 156　17 |

関
594

記録御用所

嚴有院殿御代

能勢　源姓

高三百俵

家紋　獅子牡丹　桔梗

十二目結

五七桐

能勢権十郎頼次女

女子

近江局　初　福

能勢半左衛門頼資妻

正保四年六月廿九日長大患 死穢
慶安元年 月 日 御参されし
厳有院殿御大奥より年始名代をし
かされし吉日辰の人被相やう〇〇日二年
四月六日 日光山往来の時小傳の役を
さし路次被申し御膳と去らして此
南無七面大明神の御前にて厳有院殿日
暉より祈禱をとたのみ 祈禱せ
しめしに 四國…かりかたして宮

厳有院殿の御事 あら御祈禱して成就
せしめ 御往来の時日暉より御膳
中御守并一巻の法華経を
献す〇慶安四年
厳有院殿将軍宣下の御祝ひ申
件の法華経は 御自筆をもって
南無七面大明神に御寄附被寄
其代らの 明暦三年十二月廿
三日…みまかく 同月廿八日

高麗林の旆と御厩に入らるの時
金襴一連 寶珠 銘ハ信家作出方府の箱にあり 表ハ……の彫刻有り
南無妙法蓮華経の七字を彫刻あり 又同府戸帳 又同府水
引 又同府 挑灯 又同御幕 御網あり
右は往古より述るごとく言 御ニ字永く
御府旗のよし 御直書度々有之
受るものなし
宝蔵 御
正保 ……

○昧秘良経今村に
大徳院殿御廟所御殿の在し（代）近江
に御ハ 寛檀林……建立ありしに
○寛文年中
厳有院殿 御直筆人丸の画あり
同年……村……建立……
大僧正……二十年……加……
建立し 天下泰平御祈禱の為

天照　稲荷　右両社勧請と云天照

太神宮ハ

厳有院殿御尊神より納らる寛文

二年十月廿八日絵像并大黒天尊像ハ

寛文十二年大黒天尊像有馬安近江紀伊て

奉納され并大黒天宮殿を流行の門千

年正月十一日紀伊長福殿如く

御針穀成りし四桁よ

尊叢院殿より四度と勲して夜御参

のこらず殿より御病ニかりハ御尊

ことし

厳有院殿　二尊厳有院殿ゟ江戸御鹿

御帝　御直ゟ病所ゟ御病平穏の令

ゆう給ひ不老御祈祷ハ御病平癒の月

月廿三年門跡ゟ尊宿の時祈祷

御家老并尊番の医師両人ニ外

日頃又ニ危篤ニ而ハ前田安藝守使

めしく近江の楽ハとくとも有り
偽とは偽ハさもはや今賀と病稀
御わんすて思召して御聴り
延せし将源太高よ人をりまして中
人勧任せし我帯壮但へ精し無程
二百俵かさるまで知行をはしまの
晋かたり御所清そで源太高を
めくりむ上二て法も近江のわう所る
源太高の宅へ目して度とかされ

こゝ巌流敵とかしも偽業の年中とも所り
なかなるのハ日本日月廿七日元六
十七歳池と本門寺まで葬
この近江死そのもし上方ノにまかし
巌流敵で巌流敵殺るそ
巌流敵とハ一七日の精と何時ある
紛まて格別のかまいなし老中諫
なまりかなしにしよくら三百の精をなされ
世と呼物二百の停止御触をなさせし

といへる同年十二月二日大久保加賀守
を使として入来内々近江初七日
なされ候東門寺にて千部読経料
御志る依て白銀五百枚米五百俵
御渡あそばされ候旨仰せ候ふ
高巌院殿よりも御香奠下さる同
十二年十二月廿二日来廿七日近江
一周忌あたりて御香奠白銀百枚御
高巌院殿よりも御香奠下さる

当年より御廟東門前にて
宝祚のためし心寛院殿進福のため
三月九日より廿八日まで千部
読経料を下されし連綿たり〇
同十三年十二月廿四日来廿七日近江
三回忌あたりて御香奠白銀百枚御代
高巌院殿よりも御香奠下さる

頼有

源五郎　初源助　兵庫

継母某　某柳原資嫡子

嫡母　近江局

近江局大奥正徳年中御中﨟新参

巌有院殿へ附属せしむ　寛文二年十

月十八日小十人組ニ列ス十年十二月廿

又日御小性組ニ加ス禄弐百俵ヲ賜フ宝永二元

年十一月廿七日御留守居ニ関係

浦賀奉行○正徳三年七月廿六日

病気ニ付○享保元年十二月十九日死

年六十八葬大久保東之寺ニ葬

頼辰

市左衛門

実ハ住阿部氏ノ人秀勝頼有之四男

養子年月日御書院番○御番○

右河源之丞[illegible]ニ[illegible]存候
未ダ届不申候

衛門　初　亀之助

頼富

実者松平[illegible]一色[illegible]水野忠[illegible]（[illegible]信濃守家来[illegible]次郎左衛門）

宝永七年十二月[illegible]家督[illegible]年

七月二日[illegible]二[illegible]ハ年十二月廿七日

家督小普請入[illegible]享保四年十月廿八日

頼藝

伊織

実同姓[illegible]郎　[illegible]之男

[illegible]組[illegible]宝暦二年九月廿二日[illegible]

[illegible]同[illegible]毎[illegible]年[illegible]定[illegible]

小普請入[illegible]同[illegible]ハ年十二月廿七日致

[illegible]宝暦十年六月廿九日死ス

十八歳[illegible]寺[illegible]葬

宝暦二年十二月十日遺跡〇宝暦
十一年八月二日御書院番〇明和
元年十二月廿三日死 年十六 葬同寺
同所葬

頼惟

菊三郎

実同姓河内守頼寛二男

明和元年十二月廿七日遺跡〇御書院

小普請〇天明七年五月廿六日御書
院番〇寛政八年十二月十日西丸
附〇安永四年十二月八日務方並[illegible]
御目見以後寄合〇同文化年十一月
十日依病務御免小普請入〇[illegible]
後二度〇寛政七年十二月廿六日少[illegible]
同隠居[illegible]

頼弘　右三郎

寛政十年九月十六日跡式之通
堀内之丞役同十一年十二月廿日小
納戸役堀内之丞役

（印）

嚴有院殿御代

能勝　高三百石

源姓

寛文　御小姓　指控
十一同役　名者

寛文四年六月
御七ヶ所

近江局殿ゟ者子

出羽守　初新三郎　能登守

頼澄

実同姓半三郎頼隆之男
享安四
寛政四年　八月廿一日　跡式ゟ之通　中奥

法性院日信〇同四年十二月廿八日叙
爵從四位下〇寛文二年閏月日光山
供奉〇同十年十月廿日継目江戸より
武蔵信上使不参〇六月右〇天和元年
十月廿日出府ちう段〇自筆二年
十二月八日死去存生之歳大寿四十五才より
葬

頼貨

十次郎

延宝六年頭書三日出生〇自筆
年七月十二日家督所〇元禄
六年五月九日書院番〇同十二年
十月細川京極菅信代宗家成下
さん〇同十四年五月廿六日桐之間
番〇同十六年八月廿三日御納戸〇
宝永四年十二月十四日病死無嗣

○享保十一年十二月廿日死　又指六衆
同年廿三歳
○近江局母儀
大猷院殿御筆一軸
常憲院殿御筆一軸并子息中條御状

頼種　十次郎　初　吉之助

享保十一年十二月廿日家督小普請
○同年八月十五日御番入○同十二年十二
月廿八日西丸御書院番○同十七年
十月四日依病御役御免○小普請
○宝暦元年十二月廿八日西丸御書
院番組頭○同年十二月十八日布衣
○明和七年寅六月八日西丸御留守居
御持弓頭○安永六年十一月廿日死
七十五歳　同年廿三歳

頼桐

吉十郎 初 新之助

実頼賀二男

宝暦二年二月十四日養子〇同八
年十二月十五日初見〇同十一年九月廿
四日養父死去によりて年十八歳にて家をつく
養父頼賀に従ひて大學頭を教〔illegible〕

養子とし〇明和八年十二月廿六日思所
除かれ利袋頼寛に改〇安永七年
八月十二日死ス七十八歳同寺に葬

頼喜

大學 初 元次郎 右京

実ハ本出雲守信成二男

宝暦十一年九月廿四日頼桐養子〇
明和八年十二月八日遺跡を継〇同

年十二月廿六日初見○安永六年
十二月十九日西丸御書院番○同八年
十二月廿七日家督○寛政二年四月
二日小普請組○同七年十二月廿八日小普請
務懈怠ニ付○同八年十一月廿四日死亡孫蔵
同寺ニ葬

頼廣　十次郎　初吉之助

天明元年十二月六日吹上奉行支配
御役料二百俵○同八年十二月八日吹上
支配ニ付御役料二百俵○寛政八年
十二月廿日家督小普請○同十年十二月
朔日御書院番

東照宮御代

能勢　源姓　高千五百石

家紋　獅子牡丹　桔梗
十二目結　九矢八筈

京都将軍より御紋
五七花桐

能勢摂津守頼次三男

惣太郎　初　徳太郎

頼之　初徳隆

大坂冬之御陣父ニ従天満口仕寄

ニ付○元和二年卯ノ年由書注進○
寛永六年五月廿八日御上洛供奉
○渡御勤○同九年十二月廿六日御堂之
金又指麦存候○同十年十二月七日並
御相国武百石編○正保二年十二月
元日日光之御社参之役の御宮付
拝之人仰付もとの之より同月
十二日御宮付○同月廿六日御統御宮付
五人小之勤○三之倉○慶安元年

六月十八日出雲殿ゟ渡○同
年十二月九日日光之御宮付○同二年
二月晦日二ノ剣莬屋城ゟ渡○同三年
二月十日大坂御定番ゟ渡京大坂
御同役代○同四年十二月九日大坂
御宮付○同五年正月日光之御宮付
○慶安二年七月十二日大坂御宮付
○明暦二年十二月十二日大坂御宮付○
同己年正月 御咎 日光之御宮付○万

治二年巳月廿七日大坂目付並組
結番部をえ由○同四年十二月十二日
大坂目付並組ヘ下えは○寛文元
年十二月組ハ□□□門之年十一月
六日病死代え嫡子惣十郎ニ家督被下
二男ニ宇平郎分組鉄百石○同八年
巳月十日死七十二歳武州荏原郡
池上本門寺ニ葬

元之

惣十郎　初　宮松

一万治二年七月巳日□□組○寛
文二年巳月日元□門往来候家
○同年十一月六日家督○同年
十二月組□□□□○同九年十二月
六日大坂目付□□□□□修理
□□同年八月廿二日□□□福

紀伊守ニ叙ス○同十五年四月九日
上意ヲ以テ○延宝七年四月六日家督
小普請関東郡代ニ支配ス一万石
同年九月甲州谷村ニ於テ壱万五千石
賜○同月廿八日御朱印○天和二年
四月廿一日布衣以上の人ニ同ク御科
奉加録ニ而仰出サル○其後寄合
○同三年
大蔵少輔ニ叙ス年十二月四日死
開○元禄二年八月四日信濃守
寺城門渡○同四年八月廿一日
小普請ヲ遣シ○同八年正月廿
三日火付改○同八年四月九日火
付改加役ヲ○同十四年八月十六日
病免○同十八年六月廿二日致仕ニ
而後隠○宝永五年十二月十二日死
法名○同寺ニ葬

頼香　別家　三十郎

頼雄　別家　四十郎

頼直　八郎右衛門　初 次郎三郎　後 源十郎

厳有院殿御部屋住より被召出慶安三年
より万治元年まて勤仕○寛文七年
常憲院殿 御書院番相勤百俵○元禄
元年四月廿二日死六十九歳実

子八郎五歳にて死家断絶

頼安　惣太夫　初 源十郎

大伯母進江大奥八四年より勤仕
寛文四年より同八年まて出仕
御納戸○同年四月十四日没く同兄
○天和二年九月廿五日小性組ニ
百俵○貞享二年 御納戸 頭勤乃

座敷今之丞殺之候上勤の座敷當人今
之殺相代○元禄十五年十二月廿三
日書役替○同十六年二月十八日病
死○同月廿八日死早中吉良同寺

子無

之明

別家　助左衛門　初　平十郎

頼以　惣十郎　初　右左衛門

元禄十六年八月傳日家督小普
請○正徳年十二月五日初入○享保三
年十二月十六日小性組○同九年十
一月
大須之敷附○同十年十二月朔日免
書院番○元文二年九月十五日
使番○同五年四月廿八日目出

正之忌日度○寛保元年十月二日
死年十七歳同寺ニ葬

# 頼則

熊十郎　初　源次郎

寛保元年十二月廿七日家督小
普請○寛延二年十二月廿七日西
小姓組○宝暦五年七月廿九日
死二十二歳同寺ニ葬

# 元長

熊十郎　初　源次郎　吉右衛門

実ハ同姓同幡弓頼慶次男

宝暦五年十月廿三日頼則之子
為家督小普請○同六年四月十五日
御見○同年十月六日西小姓組○同
十三年八月廿九日死二十六歳同寺
ニ葬

頼晃　勘十郎　初　九平九

実同姓吉郎一英次男

宝暦十二年十一月廿日大御番小普

請○同年十二月十九日初御目見○同十二

年十二月廿九日西丸御小性組○同日巳

年九月八日病免○同十三年十二月

廿九日御小性組○安永七年九月廿八日

死行年二十二歳同寺ニ葬

頼廣　勘右衛門　初　洪太郎

安永七年十二月廿八日大御番小普請

○同月廿九日初御目見○寛政六年十二月

廿一日中里にて家督五百石○同七年

二月十八日西丸小性組

大猷院殿御代

能勢　高三百俵

源姓　家紋　十二目結　矢筈
東方結

能勢丹波守頼寛為代

新参

能勢

慶安四年十二月廿六日浪人ゟ御徒
ニ被召出〇寛文十一年九月朔
日西丸御徒組頭〇元禄二年十一月廿二日

正徳元年生〇同九年五月十八日
病死〇同十年十一月十日死六歳
八歳雅月谷中東浄寺ニ葬

# 継人

市之丞 初 新助

元禄二年朔月出仕〇同七年閏月
廿五日出廊下番百五拾俵〇同年六
月廿八日御勘定番〇同九年二月
廿八日御納戸〇同十一年十二月廿六日
足米百五拾俵合之三百俵〇宝永
六年二月廿一日出書院番〇享保八
年二月廿二日上勅使衆令卒〇
同九年十月十五日
勝信院殿御附〇同十年六月十九日
西丸附〇同二十年九月廿日西丸
出勤仕行〇元文四年五月朔日西
丸御裏御用〇同五年閏七月

十七日病死〇寛保元年十一月廿日
死六十九歳同寺ニ葬

## 頼純

市之丞　初　久四郎

享保二十年十二月十二日初見〇寛
保元年十二月二日家督小普請
〇同二年七月二日御書院番〇宝暦
九年十二月十八日上新番ニ今之支配〇

明和元年九月廿日御書院番ニ直組
改〇同年十一月十二日布衣〇安永
二年八月廿一日死六十九歳同寺
ニ葬

## 能弘

市之丞　初　鉄吉　右膳

初尚友
実前田大和守利理四男
明和二年十二月十七日御番入〇

同年十二月廿一日初見○安永二年
十一月廿日家督小普請入○同五年
十一月六日西丸御小性組○同年十月
十二日吹上ニおゐて笠懸上覧之處拝領物二反
被下○同八年四月十六日西丸御先勤
○同年八月十八日於御庭ニおゐて馬
上覧之○同年九月十八日吹上ニおゐて笠懸
上覧之處拝領物弐反被下○天明元年十月
廿八日西丸御附○同二年九月廿五日笠
懸上覧之處拝領物二反被下○同六年十一
月廿日西丸御先勤○同七年十二月廿
八日園的射上覧拝領物二反被下○寛政
二年十月廿二日吹上ニおゐて半的
上覧之處拝領物三反被下○同七年十二月廿
同日小金牧御狩勢子○同年十月
八日笠懸射上覧拝領物二反被下○同年
十二月十日西丸御附

厳有院殿御代

能勢

源姓　高三百俵

家紋　獅子牡丹　十二目結
矢筈　桔梗

京都将軍より拝領
五七花桐

能勢次左衛門頼重二男

八左衛門　初　助十郎

頼復

寛文元年丑書院番ニ被召出

三百俵○元禄元年十月廿六日
死六十八歳二本榎某寺ニ葬

頼忠

八之助 初太郎 万之助 助十郎

致仕後號參

延宝六年十二月廿九日召小姓組○天和
元年七月六日召出○同年十二月
十一日小普請入○貞享三年十一月

九日召小姓組○元禄元年十月廿六日
父死同禄ヲ以テ家督ヲ継ク○正徳元年
十月七日病免○享保八年七月廿
三日致仕○元文二年十二月廿一日死
八十七歳同寺ニ葬

頼香

助十郎 初源助

享保八年七月廿二日家督小普請入

〇同九年十月廿五日宗性退〇同十二年
五月廿六日喚于殿上説時服の内五哉
〇同十二年十二月廿五日依病各耕(?)
同十四日時服二〇元文元年正月廿五日
四ケ嶋居被仰付同年十月廿六日今(?)武殺(?)四ツ
才以下(?)之家督被仰付(?)候
宝暦六年四月七日山里(?)(?)百(?)
御(?)(?)同八月八日(?)(?)殺(?)依〇同
九年十二月五日八十六歳〇同月十

八日布衣〇明和四年九月廿八日
四代目安〇安永六年四月同苗
頼寛所役〇同八年八月廿六日死
寺社七歳同寺葬

△宝暦十年四月
式日初入

〇安永五年
十二月廿二日初入日記

―頼中 左京亮
―頼元△□ 源吾(?)
頼武 助十郎 初 岳四郎

實父同様小左京頼寿次男
安永八年十月廿六日長子小五郎繼(?)小書

清○同九年十二月十二日初而入○天
明四年九月十四日吹上闇的上覧
於御稽古所○同七年九月晦日出精
組○同六年十月十一日吹上大的射抜
弐ヶ所○同七年十二月六日火合
羽當刑勝子○寛政十年四月
十四日居合抜術上覧之節弐両被

嚴有院殿御代
結城
源性　高百五拾俵
家紋　矢筈若杉菱
丸ノ内ニ竜甲
結城庄之助　居所林村七丸
忠頼宣
平左衛門
頼宣
延宝二年五月初而御目見之節被

百五十俵○宝永元年六月廿九日
二條御蔵奉行○享保五年七月九日
二條にて死 下谷泰宗寺ニ葬

## 頼定　源之助

正徳元年十月六日初見○享保
八年十月朔日家督小普請○同
十七年十月廿二日小十人組○同十八年
九月朔日死○浅草誓願寺ニ葬

## 嘉明　平太郎

享保十八年十二月二日家督小普
請○元文二年七月十一日西丸小十人
組○同三年六月廿四日二丸御広敷添
番○宝暦四年十二月廿六日元方御
納戸○同八年十月廿八日西丸新

留番○同十年正月廿日二丸詰○
同十三年八月廿二日本丸初○同十二
年十二月廿六日西丸新留番○安
永八年正月十八日本丸初○天明
元年閏正月廿八日西丸新留番○同六
年十月廿八日死六拾八歳同寺葬

頼紀

造酒助

天明六年十二月廿六日家督小普請

請

国立公文書館
National Archives of Japan

東照宮御代

○能勢　高四千八石

源姓　家紋　獅子牡丹　十二目結
　　　　　　桔梗　矢筈
京都将軍より御紋　五七花桐

頼光嫡子頼国十七代摂津国
住人能勢左近将監頼幸嫡子
摂津守　初　竹童丸　助十郎

頼次
惣左衛門　伊勢守

摂津国能勢郡地黄村清普寺ハ
居住し京東寺の實相寺合割
院ハ積次の寺也ハ天正十年頃
實相寺へ

東照公御家の時御手に法ハ生国にも
うしる御尋の時 能勢の摂津ハ能勢
能の名がらし 出精せしハ如二なり
能勢之御支配ハ此盧殿見
兵より能勢十兵衛といふの

右のやうに御領めつさ之實相寺
出精ハ 能勢ハ十兵衛家などへ
十兵衛之家に病にて果ちたし
まうつハ 甚五兵ハ右のやうに御尋
ようさ 細かしく十兵衛之家中に
御中御ともに名のもの数多十兵衛と
請よ為ら之やうに出生よりて領の
御中ニ至ル偏成編の趣付りつ
○慶長四年十二月十二日 兵衛札

東照宮使番ニ而 関原の時石田治部
少輔か陣へ御使として御陣ニ
と紀伊守か居所より先右近之丞
か改め掛原なる様次第入なし小
東照宮 御ことに小掛川より治部少輔か
ま在の人ニ掛る改め者御目通へ罷出
也御使役しるし候ニ慶長五
年関原御陣の候時しるし上方
将紀とまかりくだしけるに巻き

書かき所見しに仍て上書家
まらし大網門と申入呉有之
番保登氏掛川城ニ入る書子
を願ひ候て任依者見関の条へ
従ひ其陣の戦差置として
三人をニ信の恩賜を得て召寄年
九年大坂冬の陣ニ天満口の仕寄ニ出
同夏年夏御陣ニ御供なし
掛川台にて御召遣候村より陣門

伯耆守殊嘗忠ニ被親候　御情ちもあり
近ゝ迄加増可被遊旨候へきにつし御存寄
之　松平周防守忠次為那則領地長
盛と相縁ニ而候ニ付　大坂落去の間
御とも退治して　常陣の後
御情ちふ加恩二万三千石給
東照宮御台府より関東御下向の時
無度依旨して出頭して在所江帰
てい

一　台徳院殿より出雲守江為領知并府
めおくに出羽ニ而一万石つゝ元和七年
在邑の時よりも被召て出羽ニ而
同年十月家督を嫡子相定す
ゆつりむねし聴書以誓詞とも文
ふにつき

一　樽太相果申候　右履より家督を継
仕置ニ存書差上申候

一　我ホ唯今之知行役人也地黄郎間田

尻ハ三十五石沼左衛門ニ遣候式ニ而有之
由候
一 沼左衛門只今迄被存候ハ千五百石
余ハ半十郎ニ被下候様ニ被申候
一 半十郎儀ハ五百石御別実田之郎
ニ而御師居たし候村山御番問と申石
ニ而罷在候ハ其上又惣左衛門ニ被遣候ニ
被成下候様ニ被申候
一 惣左衛門知行結構ニ被仰付ニさへ候

村首半右衛門ニ而候ハ彦被
御目見ハ暮相申せ候ハ被下候様ニ
被成候ハ其上ニ而候ハ至其上ニ而候
仰候儀ハ御様ニ而候
相違候ハ、被為其上ニ而罷在候
所書置申候ハ、安ハ被下候様ニ
相立積ハ、為後日如件

元和七年
酉七月廿日　結城探山津守判

佐久間大膳橋
膳坂　法性橋
駒のまゝに被住とかうくしかし寛永
三年正月十八日死ス弥太蔵か骨
結城郡地蔵村清善寺ニ葬る
在京郡池上中川寺ニ葬
此外利根郡敷地下ニ在
○先祖宮田備中守といへるもの

甥見ら家振漆ハ結城郡舞鶴和と
安置
○源頼之所持之手彼岸破の糸の根古
来傳来
○結城郡地蔵村龍山古鐵ニ及當村
国基より代々居住せしに此の仮より
らむ正慶七年同和東の方へ
揚ル替と組しらい
正慶元年より出見人有ニ元和元年十九

同居出生来今に陣屋と称して
家人ともとくしいつり

頼重

治左衛門 初 新十郎

慶長六年初而十四歳の時大坂へ
人質として来り其後家ニ仕ふる
〇同七年於下総在所ニて五百石
余拝領〇同年正月九月相続書院

番〇元和二年正月十一日御使役〇
又信濃國ニ而上洛仕候〇同七年十七
日ゟ家督〇寛永九年十二月廿
六日御先手として御旗本
加判御目付代〇其後老中並関東
御仕置評定〇其後同十二年
二月一日死去 法名池上寺

寿斎

二男
頼隆　半十郎
寛文九年　初ノ名利和
東照宮様ゟ召出され紀州様勤仕罷有
半十郎相果ゟ家断絶

三男
頼之　惣兵衛

四男
頼久　新之丞

東照宮様ゟ召出され高五百石り元和二
年六月廿七日死去拾壱歳於紀
紀州那賀郡地男村清善寺ゟ葬
子ナク家絶

五男
頼永　市十郎

六男
頼平　半兵衛

女子　千江局

日向守 初新十郎 治房 実今川十郎

頼宗

初頼家 頼定

大猷院殿ニ初見(寛永十七年七月廿三日)○年月日不知書院番

二百俵○寛文十二年(月日不知)寺澤兵

庫頭肥前國唐津城受取として小

かし目付代○同二年十二月廿六日

家督○慶安二年(月日不知)麻布地被

給ふ後本稅町壹海地被下其よ屋門

御番役石垣奉行の命を請ま行

万治元年(月日不知)辛業○同二年八月

廿六日御使番○同二年十二月廿六日

加判目付代に二月廿六日病ニ寛文

二年五月二日信濃國小諸城を受

○同二年四月四日先に依奉

是序かる目付代にしく三千石

運上〇同年十月廿八日大坂ニ而買銭代
十二月廿日ニ至而翌年の春二千日の
分ニ而ハ掛引銭勝部ニ而米代ニ而ハ
〇同六年八月十日丹後国宮津城
京極丹後守殿地収ニ付キ買銭
代并ニ米穀銭勝部ニ而ハ〇同八
年翔肥前国島原ニ而買銭代〇同
十年八月廿八日ニ至當清行〇同年
六月廿八日ニ至屋年寄行掠〇同十一
年十二月廿八日下総国利根川新宮
又同年十二月廿二日ニ至テ八月十日
帰帰〇同年十月三日同上ニ而用你
付ニ付ニ而代官殿屋検査文兼根今所
大坂ニ〇同年織下総出大雲村其年
郷訴ニ付新田證議中　上ニ終
其上〇同十二年十二月廿二日京紀町
奉行所ニ而糸粉ニ而叙爵日向守ニ改
〇延宝六年京都ニ而病ニ而

兵庫介と號す同年十一月
十八日尾張國鳴海乃驛にて死す行年
五十同寺に葬

○頼宗室

頼宗死後寛文七年正月廿一日
年頃乃子孔よりかはしく出家して江戸に
出さるて奥の年寄を勤め後尾張
へ名代にまいり母にともに局のなく大
奥の年寄を勤め其後又年寄八枝

## 頼後

拵あるとて元禄十二年九月六日出生
○同十七年正月九日死去行年六歳
同寺に葬

八重

## 頼方

源五郎 初 實氏 熊之助

初頼致 頼常 頼時

二歳の時万治二年十一月十六日大奥
より出て祖母近江局の庭にうつる九歳
の時寛文六年八月八日御城より
かへる○同十一年二月八日御表にて
初見○同十二年四月廿九日酒井修
理太夫忠直の父子となる父日向
守殿没して後は継て酒井修理太夫殿
つきたりしに○延宝六年七月備
日父右京亮卒して病にかゝりてかくれ

殿のまへに出られ翌八月朔日
発足十一日京を立同十月又下
向の時に海津にてしせきをまつ八
同年十二月家紋を改む○同七
年二月十日家督相続の日相と
かまえしか所へ合卿より○元
禄六年九月廿六日駿府加番九
月朔日出府○同七年十月廿六日
帰陣○同十年十一月十日若年寄役

○同年十二月八日布衣○同十二年
閏月廿五日居宅より出火廿五日のち赦免
○寛永元年十月十二日御役御書院番
方角によりて大番を組減せらるゝま
ゝに御役御免申合○同二年四月十九日赦免 同六年十月
廿六日御書院番ハ西丸附興入之
同後御番御免○正保元年正月
七日死 年五十 法名良栄 同寺ニ葬

頼尚

長十郎 初 源三郎

実ハ同姓八左衛門某か長男
寛永九年七月廿九日為養子○同年
十月廿六日初見ゆ○正保元年七月廿
三日家督相続○慶安六年十一月
十八日駿府加番九月廿日西城御番同七年
十二月廿八日帰着○同八年十二月廿六日

小普請入○同年七月廿日依命少念
より暮し 野馬一疋拝領○同年
十二月 組頭和 御番入○同十七年十二月廿
四日病死○同十八年十二月廿六日實母
方伯父立花因幡守殿ゟ相続の年
まんさ 御番衆ゟ外開ニ御付ける
まりのく 同六日御目見○享保二年三月
廿一日出見○元文四年十二月十日死
五拾四歳 同日寺小葬

頼紀

源左衛門 初 式部

享保十一年十二月十六日初見○元文
四年十二月二日家督見分○寛保
二年九月十二日死 二拾四歳 同日寺
子葬

頼恭（ゆきさ）　治五郎　初　八左衛門

実頼章が弟頼尚が嗣

延享二年十二月五日養子家継ぐ寄

合○同年十二月十二日初見ゆ○寛

延二年五月七日遺跡加番九月廿

日御勝手三年十月五日帰謁○

宝暦二年十二月十三日同死小十

郎教亮家断絶すへき處頼見人を

養○同三年十一月廿六日初見ゆ○同十二

年十月十三日寄合より御書院番○

明和六年十月十日死五十四法名

寺に葬

頼直

伊織　初　常力　熊之助

明和六年十二月廿七日遺跡を継寄合

安永二年十二月廿二日初見ゆ○同四

年五月九日致仕加ゟ九月朔日
小納戸〇同三年十月廿五日御膳番〇同
八年十月廿五日大番役〇同年十二
月十六日布衣〇天明二年二月十一日
小普請組支配〇同四年十月廿日御
小性組番頭〇同年十二月十六日叙爵
從五位下〇同七年十二月廿二日紀伊守
の中にて寛政二年四月廿九日御
免〇同年八月十八日病免〇寄合

九年六月十七日学問出精一段の旨
御聞に達し時服二領賜〇同十二年四月
〇十八日出てそ掲ける右代ゟ相伝ハ蟇目の札古の
者ハ古来より伝へて嫡世にてさてハ
継嫁の忌札とれて
〇当家ハ同姓あ合として来る門
姓も諸家にてもことなる先祖
摂津守より出るよし伝へ後
中合同とても十九八日服番ニ出

いよし来り候節ハ御聴ニ入しか
以後年能勢河内守小性勤のうち
有徳院殿 思召ニハ二千石方同姓も
毎月命日今ニ絶させるやと御尋ありき
河内守申請ニハ毎月十八日君来乃
まゝ日君命日ゆゑし申上しかハ御賞
美の思召ニて以後ハ永く此ために連綿と
しかへる

寛政十一年四月十八日大番備(?)

東照宮御代
能勢 源姓 高二千石
家紋 獅子牡丹 桔梗
十二目結 矢筈
享保将軍より拝領 五七桐
能勢摂津守頼次二男
小十郎
頼隆
慶長九年 初而御目見
東照宮ニ而小性ニ召出され采地千石(?)

やされし〇大坂両陣父とともに供奉〇
元和二年より江府ニ来て
台徳院殿ニ奉仕〇同七年見人ニ被召
許容候ふしく所せし播州飾東郡
のうち千五百石余下されし〇年月日不知江
使役〇寛永二年七月四日上洛の
供奉〇同九年十月廿四日近習番
同十年二月二日九州へ發足〇年月不知
仙台へ御使〇年月不知会津南部へ

御使〇年月日不知播州姫路へ御使〇年月日不知長州 慶安二年五月十一日隠
萩へ御使〇肥後熊本へ御使〇明暦
二年十二月廿二日死七拾余歳
別号住京都池上東門寺ニ葬

頼春

勝九郎 初 藤三郎

寛永九年月日不知御書院番〇寛文
四年十月廿九日死二十三歳〇法号

早世

頼負　又市　次郎
紀伊殿ニ仕

頼澄　山城守　初　彦六郎
[illegible]

頼廉
初頼周
半十郎　初　惣之丞

頼亮　半十郎　初　小太郎　小八郎
延宝二年八月廿一日初見○同四年
十二月廿六日家督○貞享二年十
月十一日桐間番○同年十一月十四日
小普請入○元禄二年十二月廿
六日小姓組○元禄十一年九月十
九日死五十九歳同寺ニ葬

實同姓要次郎隆重之曾孫

享保二十年四月廿八日継養父之跡

十二年十二月十六日御書院番○

同十六年十二月廿八日御小姓組○元文

二年六月廿七日大坂御番代○同四

年正月朔日御番○寛延三年

九月朔日

有徳院殿御附中奥小姓○同年十一月十日寛延已

年七月十二日宝暦二年

七月廿九日死 年四十七歳 同月廿一日葬

頼暢

源蔵 初 源之助 孝助

母 某氏

實同姓十次郎頼賢之男

宝暦二年十二月廿八日為頼亮養子時

の中に先くして 頼亮の息男たるによ

新の通 同廿九日頼亮の世を継

ニ追腹いたしく志のことく同年十
二月十日に死し稲葉存命のうち
不慮の事いできしとめて家断絶
稲幡か養子にありしを（たまはる）
其後追腹諸人のうらやく家富に
佃り一生涯を立ゝことさら御加増されれ
つ天明二年十一月廿日
有徳院殿御法会の砌稲幡殿
ゆえつ宝暦六年十二月廿日死

大寿 却立寺小葬

常憲院殿代

能勢　源姓　高百五拾俵

家紋　十二目結　東方結　丸ニ

能勢新左衛門能業次男

新五郎

頼房

元禄六年十二月廿六日新ニ被召出され
初而御廊下番〇同年五月十八日
御小納戸〇同十七年五月廿六日死

次番○同年十一月九日小普請入
○享保七年十二月廿七日田安小十
人組○元文五年八月病免○寛保
元年六月廿八日死六十六歳雑司
谷本浄寺ニ葬

頼利　新莊　致仕　樂柁

寛保元年九月日不知家督小普請

頼定　新之丞　初　次郎七郎

請○寛保元年十二月同日一ツ橋小
十人組○同二年十二月十一日同所
大番○同四年五月日不知病免
○明和二年四月十日致仕○天明
七年八月十二日死七十七同泰同
寺ニ葬

實長次男七郎　親貞之子　曽
明和二年四月十日當家相續小普
請○同六年七月六日田安殿小姓
○安永二年八月十八日拂方御納戸○
同四年閏十二月廿八日病死

常憲院殿御代

結城

源姓　高六百石

家紋　梛子井桁　撫子
十三目結　各唐
東都将軍家拝領
五七花桐

結城與大島秋之之曽

甚平郎　初　彦重

頼旗

寛文六年十一月十八日家督相續之兼
二年七月十九日死　四十六歳　大清

本之丞 小普請

頼一

服部与 初八十郎 源七郎
兵十郎 太四郎

元禄二年十月十二日家督小普請
○宝永四年十二月廿八日小姓組
同六年十二月廿七日小納戸○正徳六
年五月十六日小性組○享保四年
八月八日御納戸頭○同十三年十二月
廿二日半知○同年十二月十八日
布衣○同十三年正月廿日老衰ニ依
願○同二十年十月朔日御目附役（同十四年十二月廿八日小姓組番頭）
○寛保元年十二月十八日加役被免
○寛延二年十二月十九日依願免（○二月廿六日町奉行 同年）
○宝暦二年三月廿八日西丸御旗
奉行○同四年十二月廿八日病免
○同九年十月十一日死六十二才

同寺ニ小葬

一 英

喜四郎　初　助之丞

元文二年九月十八日初見○
浚明院殿山王 御宮参之節入御する○
寛延二年十二月廿六日西丸小姓組
○宝暦元年八月二日家督○同六
年十月九日御納戸番○同十年

六月廿二日出役○同年十二月十八日
布衣○同十四年四月廿日死、年
三十歳同寺ニ葬

頼復

喜四郎　初　助之丞

宝暦十二年十二月十八日初見○同
年九月廿六日
孝恭院殿山王 御宮参之節入御する

○明和元年七月四日家督、小普請
○同六年十二月廿二日小納戸○同七年
十二月十八日布衣○安永七年十一
月廿九日本丸御小納戸被仰付候時
服二領拝領○同年同月大納言様上総介殿二
御届〆茂也度○

浚明院殿御本丸へ二度め出仕ニ付又摘綬
小納戸役附等小納戸兼
浚明院殿御葬送并文昭院殿御霊屋詰

矢野堀の花活拝領○天明七年
十二月廿二日本丸小納戸被仰付候時
服之拝領

頼臣
助之丞 初 要人
寛政六年八月廿六日初見○同年
九月廿七日
大納言様出生御用掛小人頭○

同年十二月廿七日為御書院番

厳有院殿御代

能勢

源姓

高七百石

家紋 獅子牡丹 桔梗
矢筈 十二筈

京都ゟ御帰りより拝領 五七花桐

能勢権兵衛頼次二男

半左衛門

頼平

万治元年十二月廿八日初而御目見

御書院番○天和二年十二月二日死

寛四門中西之跡〇同月廿二日初拝謁
儀と加秩ゟ都合七百石采地ニ成
下さる〇（同年十二月十五日布衣）元禄元年六月九日御役〇
鉄炮頭〇（依病）年月日布衣〇同六年十二
月六日死七十二歳別荘京都池
上東門寺ニ葬

頼氏
小十郎 初第二郎 母某

頼鹿
小十郎 初 二郎之助 母某

延宝元年八月十二日八歳にして初見え
〇元禄元年十二月二日小姓組〇
同五年十二月廿二日御腰物〇同六年十二
月廿六日桐之間番〇同七年正月
十二日小姓組〇元禄十二年八月八日
死二十四歳同寺ニ葬

## 頼治

興市郎　初　小七郎

実同姓秀膳頼賀次男（紀伊殿家来）
元禄十二年七月九日生於紀州少兵衛信
〇同十六年十二月九日出書院番〇享
保八年八月四日死年二十六葬同寺
小日向葬

## 頼喬

半左馬　初　主膳

實同姓甚八郎隆重三男
享保七年八月二日生子〇同八年十
月廿九日於紀州出生請〇元文元年
八月八日死年二十葬同寺小葬

実同姓長宇郎頼尚四男
元文元年十月四日於紀州出生小

嘗請○同年十二月十一日御目見○元文
二年十二月四日西丸小性組○宝暦
十一年八月二日西丸勤○同十二年
十二月五日西丸番頭○安永四年四月
廿四日西丸小性組番頭○同年閏十二月
十六日布衣○同八年四月十六日西丸
丸勤○天明元年五月廿六日西丸清
○同六年閏十月廿一日西丸勤○寛
政八年十二月廿八日願之通隠居

○同八年七月十九日死七十六歳八丁本門
本寺は葬

頼常

兵市郎 初 造酒 雅楽

安永四年閏十二月廿八日初御目見○寛政
八年十月四日家督小普請

厳有院殿御代

結城　源姓　高五百石

家紋　撫子　牡丹　桔梗　十二目結　[illegible]

寛文拾年より為紋　五七花桐

結城惣右衛門頼之二男

三平郎

頼香

万治元年八月廿二日初而○寛文二

年十二月廿一日御書院番被仰付（三十六日より御切米給候月）足米百俵

〇元禄八年八月十四日病死〇同十六年十月十日死六十四歳戒名大(?)本立寺ニ葬

頼成

二十郎　初十兵衛　甚十郎　甚九郎

貞享元年八月十日初而御目見〇元禄八年十二月九日家督小姓組〇同七年正月廿六日桐之間番〇同年九月十八日小

姓組〇同十四年六月十二日依病御番御免
〇正徳元年六月十八日中奥入被
秩禄百石（此時之記ノ旦家督之節被下置候地方百石と都合ヘかやう八）〇享保
元年二月廿一日御書院番御役ニ付宝永
御役も已ニ同月御同日加増ニ而可為
近々早来迄之事とかく
十來之儀も小今度御役被
宝庄依仰付らるゝにつきとく格
場不安用かくかりかと哀れ八

時ニ江府ノ傷ヲ出サレテ保
なる○同年十二月七日山井門の色ハ依
春より付出仕さるゝ処乃
出同氏養子る○同十年十二月廿八日死
年九歳同寺小葬

頼董

母 頼咽

三平郎 初 喜平郎

正徳二年七月晦日初見○享保十
年八月廿一日元服小納戸○同十五
年六月十二日御書院番○同十八
年十月廿二日御小上ニテ大御上使
○同十九年十二月九日切米○同
二十年二月九日御小性大御○
宝暦二年十月廿一日病気ニテ辞職○
同五年十月廿八日死年四十四歳同
寺ニ葬

頼侯

勘十郎 初 平八郎 喜十郎

元文四年十月十八日初見○寛延三年十二月廿日西丸小姓組○宝暦二年二月九日吹上ニかく

清水屋形大納言殿ニ附○同六年十一月廿八日死二十七歳同年ニ葬

頼寛

忠右衛門 初 三十郎

實同姓喜十郎頼為八男

宝暦五年十一月廿一日舅喜十郎養子○同年十二月廿七日家督小普請○同六年二月十八日初見○同年十二月十九日御書院番○安永二年十一月十七日夜死附弘公自害四十一歳同年ニ葬

頼近　傳十郎

安永二年巳二月廿八日初御目見小普請〇天明六年十二月二日死二十歳

同寺ニ葬

頼愛　監物　初　卯之助

実ハ同姓河内守頼忠二男

天明六年十二月廿八日[illegible]

小普請〇寛政六年十二月廿一日中

里村[illegible]

常憲院殿御代

纐纈　高三百俵

源姓　家紋　十二目結
十文字之内[illegible]

纐纈惣十郎元之嫡男

助右衛門　初　安十郎

之明

天和二年四月五日桐間番ニ被召
被下三百俵○貞享二年四月廿八日
御書院番○元禄六年十月九日

死二十一歳武州荏原郡池上本門
寺に葬す

頼利　若狭　初　彦太郎　惣三郎

實は大草平吉正詔利か三男
元禄六年十二月十一日遺跡を継ぐ小普請
○同七年九月十八日桐間番○同年
十月九日御書院番○同十六年二月二日病

死○寶永六年四月八日死す二十八歳
同寺に葬す

頼常　助九郎　初　與助

實は源九郎右衛門友定か次男
寶永六年六月廿三日遺跡を継ぐ小普請
○享保四年十二月十二日御書院番
○同十年六月廿日病免す○同十二年

首日曾呼ニ入的ニ亦御時服被下○同十
五年十二月廿八日御供ニ被召出同日ゟ
時服三拝領○宝暦九年八月廿二日
死六十二歳大久保法台寺ニ葬

頼秋

又十郎　初　金太郎　三水

實ハ覚　新太郎正平二男

元文五年八月廿二日觀世方へ○寛延

三年十二月廿日^[西丸ノ]小姓組○宝暦十一
年八月三日番方○同十二年
三月廿七日中野桃園ゟ之的ニ
被仰付御褒美致○同年十二月
廿日西丸附○明和元年十二月
廿八日病免○同二年十二月十九日ゟ役
仕法務ニ及ひ○安永二年六月八
日死五十二歳同寺ニ葬

頼廉　又十郎　初　安太郎

明和二年十二月十九日家督小普請

○同八年九月廿七日浚明院殿より

大納言殿御時服二ツ給○天明二年

閏四月廿七日同支配組頭○寛政元年

六月晦日出役不束ニ付小普請入

享和同年十七月廿一日致死○

頼章

主水　初　安太郎

寛政元年八月十九日初見

有徳院殿御代

能勢　高六百石

源姓　家紋　獅子牡丹　十二目結
　　　　　　矢筈十文字　桔梗

享保九年より書改　又七郎頼桐

能勢半十郎頼隆次男

秀勝　初　次郎九郎　又　次郎

頼員

初　教直

紀伊大納言頼宣卿へ御附被下さ

息女今方今格枝室とされ○二歳に
年九月六日死去於武蔵大念寺ニ
寺ニ葬

隆重

初 頼亮

幼八郎 初 小三郎

寛文九年 月日不知 紀伊中納言殿へ九
歳より小姓ニ召出され現米

八拾石下され
有徳院殿紀州より御本丸へ入らせらるの
時享保元年九月廿六日
御同道御入○中納戸格仰付られ
紀州よりの通し三百石にて小納戸頭を
引続きつとむ○享保二年十二月八日
死ス 年七十歳 同寺ニ葬

河内守
伝十郎 初 小太郎 亀次郎

頼忠

享保二年四月廿六日御書院番〇
同四年十二月廿八日
長福丸様御小性〇同八年十一月十八日西
丸御小納戸〇同九年十二月十八日御本
叙爵〇同十二年十二月小納戸頭取格
〇同年九月四日御小性〇同十三年

四月日思召有之依之〇同十四年
四月十八日四男播磨殿の附弓左衛門よ
仰付られ縁組一所其頃彌帯後
より私曲仕候ニ付本堅く候〇同十
六年十二月四男ま年弓右衛門と勤
候ニ付其上にて御政務京備前守殿長
自席の上ニ足利幕府の事新
儀法対礼日記一巻 御前ニて
候〇元文二年九月十五日

右馬頭殿　刑部少輔殿へ出陣申
哉と申され候時ニ佐竹義宣出馬常
もしかたハしく唐なる[illegible]白旗
仰ける私家康公御陣所へ参編
○同二年十二月九日ニ國ニ傷ニ付く
流行る仰付られ白河義光許
新田若出発道[illegible]同
○寛保元年四月朔日出納
二百[illegible]

○同断出仕願申
有信殿御尋ニ付[illegible]
毎月[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
もとり[illegible]
○寛保元年十二月十八日[illegible]

百俵○元文二年九月廿日病免し
依之支配のもとにありてのちく
寛延元年勤○寛延元年五月廿六日
西丸にて添番となる○同年七月
十二日徒目付より普請役となる○明
和七年六月二日小普請に入る
○安永二年十二月十四日死六十九
歳同寺に葬

頼継

惣八郎 初 多宮 仁平郎

實は深沢右近某養子

寛延二年十二月十日家を継年十七子

○同四年十二月九日初見○宝暦

十三年九月廿八日書院番となる○

明和六年十二月廿二日小納戸○同月

年九月二日死ス二拾九歳○同二年十葬

河内守　初　小太郎　周防守

頼隆

実頼隆惣領

明和六年十月廿六日嫡子承祖○安
永二年二月廿二日初見○同四年
二月八日叙爵小笠原清○同六年十
月十九日御小納戸○同月廿二日免
除○同年十二月十八日布衣○同八
年四月八日一様奉公○天明元

年四月廿一日御小納戸○同年十二月
廿八日免御小納戸○同四年二月
廿二日羅漢寺へ仮寓する村留二月廿六
日願之承候○同六年十月十七日
免補○同年十二月廿二日免除○同七年
八月八日免補○寛政六年十二月
十八日叙爵同備中守○同七年二月廿六日小倉(?)
四座持役○同年四月廿六日河内
守○同九年七月廿日死去

頼常

正右

寛政六年閏月二日

竹丸君御徳○同年十二月廿五日家

丸初○同年九月廿八日

善之進○同十年七月廿一日西丸御小

姓○同十二年十二月廿六日河野邦之

丞仮屋敷内頭同月時腹之

有徳院殿御代

紀勢

源姓

高三千石

家紋 獅子牡丹 桔梗

十二日結 矢筈

京都御染より御紋 五七花桐

紀勢摂津守頼況四男

市十郎 初 喜松

頼永

元和四年三月二日紀州十一藩の時初見人口

寛永二年正月朔日新知八百石拝領
余○同年正月朔日書院番○同
九年十二月廿九日御加増○同年十
年二月七日五百石加増都合千石○同十
四年十一月廿七日書院番○正保三年
正月廿三日大御番之組
御使番頭被仰付○寛文二年十月
九日新番頭○天和二年二月廿二日
加増七百石○同年七月廿八日死七
十四歳法名紹雪葬池上本門寺

子無

紹雪 初亀太郎 権十郎

頼寛
初頼相 摂津守 対馬守
寛永二十年正月御目見近習番の
侍小く只蔵の時より
厳有院殿若君御時御小姓被仰付
正保三年○明暦三年十二月廿八日

中奥小性新参三百俵下さる○寛
文二年十二月廿日小性○同年十二
月八日加秩五百石○同月廿八日叙爵
○同八年十二月廿五日加秩五百石○
延宝八年九月八日廢黜寄合
○同九年五月廿五日御書院番組頭
○天和二年小納戸家督方半十郎
一五百石加増○貞享二丑年

月八日御書院番頭西丸ニ而本申
二十日常府の御書院番組頭被下被さ
ま其後○同二年九月望日被人其
組頭得替ニて宅台御合代書被分
○元禄元年五月二日大坂町奉行
加秩五百石都合千石余領○同二
年十二月十二日町奉行○同十年
正月廿八日病死○同年十二月廿七日
死去十八歳同年小石川葬

一正

甚十郎

寛永二十年 月日不知 三歳の時より近江局の傍にあつて

厳有院殿に仕へ御小姓となる○万治二年十二月廿八日御小姓組○寛文二年 月日不知 御納戸番○天和二年 十二月十二日 朔日不知 御納戸

武田を称す○貞享元年十一月十七日死す

四十二歳 某寺に葬る

頼恒

忠右衛門 初權太郎 市十郎

天和二年 月日不知 初見○貞享元年十二月家督を継ぐ二百俵余小普請○同年十二月晦日伯父頼寛か養子となり断絶

出雲守 初 権九郎 市十郎

頼恒

實同姓半十郎一正弟成

天和二年七月 日不知 初見○貞享元

年七月 日不知 奥之御番 小普請○

同四年十月御番入 弓矢三百石

賜○元禄四年十二月御書院

番○同六年十一月十八日 子病ニ依テ番○

同十一年七月 日不知 定火消○同年十二月

廿二日御役御免○同十二年十二月廿四日

御小性組番○同十四年八月十二日

新番組頭○同十五年 日不知 御納戸頭

○同十六年七月十一日同元禄年中度

同月廿八日御徒頭○宝永六年八月廿

七日目付 先手行○正徳元年十二月廿

病気ニ依テ○享保七年正月廿一日小普請

支配○同十二年八月廿一日病死○同

年十二月十九日御役儀二百俵借○寛
保二年十二月九日死七十二葬池上本門寺
小普請

頼喬　周防守　初彦八郎　権八郎
実頼寛二男　市十郎

元禄十二年八月廿二日生○同年
十月廿八日初見○宝永六年四月四日
書院番○享保十二年十二月十九日
御徒頭○同十三年四月廿八日同組
先手○同十九年十月八日小普請組支配
頭○寛保二年五月廿八日甲府勤番
支配○同年　月　日叙任周防守○
延享四年九月廿八日大目付○宝暦

六年十二月廿二日死六十六歳同寺
ニ葬

頼徳

市十郎 初 権十郎

元文四年十一月廿八日初見ス寛延
二年十二月廿三日病死依テ遺跡ヲ宝暦
六年五月十一日家督ヲ宝暦十二年
十二月二日死二十四歳同寺ニ葬

頼愛

権九郎

宝暦十二年十二月廿七日家督小普
請ノ安永二年十二月廿八日死二十
八歳同寺ニ葬

頼寛 初頼侃

市十郎 初 平蔵

實門姓吉田前一英曇
安永四年三月八日長光寺住持
公帖請○同年四月廿八日初入寺安永
五年二月廿五日勇退出世継○同八年
四月廿八日世寿九秩○天明元年十二月
廿八日再住勅○同八年十月廿日出世
九秩○寛政二年十一月四日右筆官
付代七月廿八日住職○同年十月
三緒在籍中

禁裡　紹滴　寶覺行所選定寛未
禁裏御入院同月廿二日新選同禅入
三年選壁の時命為とせん随處
同月廿六日
紹滴選年十二月四日
寶覺選年名選當の時教帝覺不作之
取置抄見之○同六年四月四日
帰陽○同六年十一月廿九日四度書

同年十二月廿八日下総守ニ叙ス　同九年
六月廿六日大坂御城代ニ成ル　同七月朔日
卒　同十年十月朔日御暇

○　東照宮御代

能勢
源姓　高四百石余
家紋　矢筈　丸ニ亀甲

頼光より出　摂津国能勢郡能勢ノ城主　能勢
因幡守頼勝　五代　源五左衛門（米）　仲次　長兵衛　法名

頼安
四郎左衛門
東照宮ニ召出され元和年中

御勘定方ニ而相勤候処御勘定組頭
被仰付候節（御役料不被下）寛永年中肥前
天草一揆討伐として松平伊豆守
御陣の時足軽大将軍中之根の
役々之被地ニ罷向自身ニ而取候
彩しく申ニ付而ニ而被仰付
帰府後被仰付（御役料不被下）二百俵一年
十二月廿七日死 根津瑞蓮寺ニ葬

曲林

頼重

庄三郎

祖父依而（御勘定方）御勘定組頭（病身ニ付）小普
請（寛文五年五月十九日死同寺
ニ葬

頼次

武兵衛

神谷住より四半勤定之〇四半勤定之組氏
父ト同付関東組氏なり
〇広敷人小普請〇元禄十
二年十二月廿八日死同寺ニ葬

某　兵庫
元禄十三年十二月〇〇
〇跡絶家

頼實　五兵衛

加　並九郎

神谷住より四半勤定之〇四半勤定之組氏　元禄二
〇広敷人小普請〇同十三年十二月〇〇〇〇
享保四年十二月
十日死同寺ニ葬

頼胤　清之助

実同姓権之助某次男
享保四年十一月廿七日家督小普請
〇同九年八月廿二日甲府勤番〇
同年九月廿八日出仕〇同十二年
二月十二日組頭〇定宗元文元年十二月廿
七日死四十　罪甲府中大泉寺ニ葬

葬

又右衛門　初 彌之助

敏方

延享元年九月二日家督○宝暦（甲府勤番）

八年四月朔日甲府勤番入○同九年

十二月十七日小普請入十年正月勤番被（○明和七年十二月廿三日病免○安永二年四月廿一日甲府勤番）

仰付○天明八年二月廿七日死於

果同年月日葬

頼政

万蔵

寛保元年本郷清水御屋敷

安永六年五月廿六日家督○天

明八年四月八日家督甲府勤番

寛政八年七月朔日甲府勤番入同月

十六日病死

横田河内殿

結城　　高百弐拾二俵

源姓　　家紋　亀甲之内花菱　木瓜　五七桐

頼光より出　摂津国結城郡住

結城太郎　頼時次男源左衛門尉

弘氏代

安和　[illegible]

竹橋ニ而御□□□□中来知定○甲州
戊役○死

頼良　又之丞
甲州戊役○死

貞成　又左衛門

貞享二年九月朔日於桜田御門厩ニ而
家宣公御代御目見宝永二年正月朔日
文昭院殿御代ニ御物見之御役被仰付
御代官○正徳二年七月廿八日死五拾
二歳

頼房　又左衛門
実ハ伊東三左衛門二男

正徳二辰年五月廿九日表右筆○同年
十二月廿八日父死跡式無相違被仰付以
御役後同年十二月十六日表右筆小普請○
享保十八丑年九月十九日大御番○
小十人組○同十九寅年十二月六日死二十五歳
谷中一日宗寺葬

頼維
幸次郎　初　竹次郎

享保九辰年九月六日家督小普請
○元文元辰年四月六日小十人組○同
申年十二月六日死二十一歳一乗同寺
葬

頼寛
源八郎　後任若随
實佐藤小源太信貞次男
元文五申年二月一日家督小普請

請ノ宝永二年十二月廿五日致仕

又左衛門 初 大蔵 了汁

頼恭

實佐藤出羽守信貞三男

天和元年十月廿二日為養子ノ宝永二
年十二月廿八日家督ノ小普請ニ同四
年九月廿五日初テ御目見ノ同十年十二月
廿九日富士見御宝蔵番

日本政府図書
内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan